普通高等教育『十一五』国家级规划教材
新世纪高等学校日语专业本科生系列教材

日本近现代文学

作品选读

阮毅 编著

总主编 谭晶华

上海外语教育出版社
SHANGHAI FOREIGN LANGUAGE EDUCATION PRESS
外教社

普通高等教育『十一五』国家级规划教材
新世纪高等学校日语专业本科生系列教材

总主编 谭晶华

日本近现代文学作品选读

阮毅 编著

上海外语教育出版社
SHANGHAI FOREIGN LANGUAGE EDUCATION PRESS
外教社

图书在版编目（CIP）数据

日本近现代文学作品选读 / 阮毅编著.
—上海：上海外语教育出版社，2014（2015重印）
（新世纪高等学校日语专业本科生系列教材）
ISBN 978-7-5446-3517-2

Ⅰ.①日… Ⅱ.①阮… Ⅲ.①日语—高等学校—教材
②文学—作品—介绍—日本—近现代 Ⅳ.①H369.4：I

中国版本图书馆CIP数据核字（2013）第257555号

日本文艺家协会著作权使用许可证号 177868

出版发行：上海外语教育出版社
（上海外国语大学内） 邮编：200083
电　　话：021-65425300（总机）
电子邮箱：bookinfo@sflep.com.cn
网　　址：http://www.sflep.com.cn http://www.sflep.com
责任编辑：王　俊

印　　刷：上海信老印刷厂
开　　本：890×1240 1/32 印张 14 1插页 字数 470千字
版　　次：2014 年 4月第 1版 2015 年 12月第 2次印刷
印　　数：1 100 册

书　　号：ISBN 978-7-5446-3517-2 / I・0258
定　　价：26.00 元

本版图书如有印装质量问题，可向本社调换

总序

21世纪是一个国际化的高科技时代，也是一个由工业社会进一步向信息社会转化的时代。科学技术的高速发展、新兴交叉学科的涌现、人文文化与科学技术间的相互渗透和融合、社会的信息化以及知识、信息传播技术的日新月异加强了世界各国文化的交流、碰撞与合作。要想在激烈的世界竞争中立于不败之地，就要占领人才培养的制高点，培养出世界一流的高素质、高水平人才。

由于社会对外语人才的需求已呈多元化趋势，以往那种单一外语专业的基础技能型人才受到挑战。今后我们仍然需要培养《源氏物语》的专门研究家，但是高校外语专业的教学必须从过去的『经院式』人才培养模式向宽口径、应用性、复合型人才培养模式转化。社会要的不光是懂外语的毕业生，还需要思维敏捷、心理健康、知识广博、综合能力强的精通外语的专门人才。

我国的外语教学界已充分认识到，对国家建设发展急需的外语专业人才加大培养力度，提高其能力和素质是一项迫在眉睫的任务。随着我国日语专业教学点设置的不断增加和招生规模的逐年扩大，日语专业本科生的教学改革、学科建设及教材出版亦取得很大的成绩，各地先后出版了一批在全国有影响的优秀教材。正因为社会对日语人才的培养提出了更高的标准，同时对日语学科的建设也提出了新的要求，因

此，日语本科生教材的编写和出版也应该顺应潮流，开拓创新。

我国外语教材和图书出版的基地、领头羊之一的上海外语教育出版社（外教社）以高度的责任感和高瞻远瞩的视野，在充分调研的基础上，抓住机遇，于2003年8月邀请了全国主要外语院校和教育部重点综合大学日语专业的近20位专家在上海召开了『全国高等学校日语专业本科生系列教材编写委员会会议』。代表们完全认同编写『新世纪高等学校日语专业本科生系列教材』的必要性、可行性及紧迫性，并对编写立意、教材构建、编写审校程序提出了许多积极、中肯的建议和要求。之后，外教社又多次召开全国及上海地区专家学者会议，分头撰写编写大纲，确定教材类别、项目，讨论审核样稿。经过两年多的努力，终于迎来了第一批书稿的付梓。

本套教材共分语言知识、语言技能、语言学与文学、语言学与文化、语言学与翻译（中日对译）、人文科学、经济贸易、测试与教学法等若干板块，可以说几乎涵盖了当前我国日语专业所开设的全部课程。编写内容根据因材施教的原则，深入浅出，反映各个学科领域的最新研究成果；编写体例采用国家最新有关标准，力求科学、严谨；编写思想贯彻了在帮助学生打下扎实的语言基本功的基础上，培养学生分析和解决问题能力的原则，全面提高学生的人文、科学素养，养成健康向上的人生观，成为合格的外语专门人才。

本套教材编写委员会云集了我国日语界学者专家，其中不少是高等学校外语专业指导委员会的委员。每一种教材均由编写委员会的专家们仔细审阅后确定，有的是从数种候选教材中遴选，总体上代表了中国日语教材学发展的方向和水平。我们相信，外教社这套『新世纪高等学校日语专业本科生系列教材』的编写和出版，一定会促进我国日语专业本科生教学质量的稳步提高，其前瞻性、先进性和创新性也将为日语教材的编写拓展更为广阔的视野。

谭晶华

上海外国语大学常务副校长

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

前言

教材乃专业教学的基本平台，其重要性不言而喻。笔者矢志埋首日本文学研究已有二十数年，一直以向国内日语本科专业课程提供一本既有利于教师的课堂教学，又有利于日语专业学生学习，能切实促进学生日语综合应用能力提高的教材为努力方向。本书系笔者统览日本近现代文学全局，并从我国日语专业实际情况出发，从教与学的角度进行深入思考，经十余年在教学实践过程中反复调整、修改、补充，三易其稿逐步完善编写而成。

诚如本书中(第20页)中村光夫所言，『文学乃使用语言的艺术』，文学亦是文化的载体。学习日本近现代文学作品，不仅能帮助学生认识明治时期至今日本各阶层人士的情感与性格特点，亦能通过日本近现代文学作品把握日本人的审美意识、价值取向、思维方式，还能感悟到日本文化的真谛，丰富学生对日语要义的理解。但日本近现代文学作品篇章浩瀚，如何选篇，选什么样的作品为教材则大有讲究。

本书精选了名作十二篇，以日本名家的小说作品为主，照顾到了不同时期、不同流派的代表性作家的作品，并兼顾到小说、诗歌、随笔、评论等不同的体裁，使教材更为全面地反映日本近现代文学特色，更加实用。且所选作品不掐头去尾，保持其原汁

原味。在教材的编写上，除了精选的作品本文外，同时精心设置了如下项目：

(1) 注释

『注释』不仅是学生学习、了解本篇各词条意思的钥匙，亦是学生初步了解日本文化及历史的重要依托。本书注释力求详细且准确。

(2) 作者介绍

众所周知，作者常常因其出身环境、成长经历不同，所创作的作品亦受其影响而展现不同的风格。故『作者介绍』对理解其作品有着非同寻常的意义。

本书力求全面、准确地反映各作者的出身、学习经历、成名过程、主要作品、文学观、创作风格变迁、文坛上的地位与影响等情况，旨在为研究其作品及其本人提供可靠的信息及资料保障。

(3) 作品导入

对一个零起点的日语专业三、四年级学生而言，用日语直接理解日本文学作品，其难度之大可想而知。但从专业角度而言，每一位日语专业的毕业生是都应该具有用日语直接读解日本文学作品之能力的。因此，如何用心去写好每篇作品的『作品导入』，带领学生自然地进入作品，显得尤为重要。

本书的『作品导入』，前半部分主要用通俗易懂的语言介绍作品的梗概，后半部分重在提示和说明作品的要点及创作当时的背景材料或事实。

(4) 学习与研究

迄今为止，国内已出版的绝大多数同类型教材均未设置『学习与研究』(思考题)项目。

本书从我国日语专业实际情况出发，以笔者多年的教学实践为基础，为各篇作品设置了完整的思考题系

列。各题紧贴作品实际而设置，既有利于教师课堂教学和布置课外作业，亦有利于学生自主思考和加深对作品的全面理解。

顺便提一句，各篇作品的思考题中均有一至二题可深入思考、扩展研究范围而发展为本科毕业论文的研究课题。

(5) 撰写毕业论文参考资料

随着我国日语专业整体教学水平的不断提高，这几年来在毕业论文的选题上有越来越多的学生选择日本近现代文学作品或相关联的课题为题目。此乃好现象，是专业教学水平提高的必然结果。但实际上，有相当数量的学生有意以日本近现代文学作品为毕业论文的研究课题，却苦于在研究参考资料方面无从下手而作罢。

鉴于上述现实原因，本书特设置此项目，并精挑细选了相关专业研究论文附于每篇作品之后，供有志于以日本近现代文学作品为毕业论文课题的学生『按图索骥』或『顺藤摸瓜』去寻找自己心仪的资料，更好地完成本科毕业论文。

为了便于学生记忆和掌握，除第一篇《何为文学？》外，本书在内容编排上以作者出生年月之先后为序。

本书亦适用于硕士研究生的日本文学课教学。

阮毅

于深圳大学

二〇一三年六月

目次

一、日本近現代文学概観……1
二、中村光夫「文学とは何か」(評論)……20
三、森鷗外「高瀬舟」……45
四、夏目漱石「文鳥」(随筆)……71
五、国木田独歩「非凡なる凡人」……103
六、島崎藤村「初恋」(『若菜集』)「椰子の実」(『落梅集』)(詩歌)……130
七、志賀直哉「城の崎にて」……142
八、谷崎潤一郎「刺青」……159
九、芥川龍之介「藪の中」……183
十、横光利一「蠅」……210
十一、川端康成「伊豆の踊子」……229
十二、大江健三郎「飼育」……277
十三、村上春樹「蛍」……344
付録……391

一　日本近現代文学概観

（一）明治期

日本の明治初年、明治維新政府によって、政治・経済の分野での西洋化が急がれ、「文明開化」と呼ばれるほどめざましく近代化が進んだ。さまざまな方法によって新しい思想や科学に関する啓蒙活動が展開された。明治六（一八七三）年に結成された「明六社」は、洋学者の集まりで、機関誌『明六雑誌』を発行し、新思想や新知識を移入紹介した。森有礼・西周・加藤弘之・中村正直・福沢諭吉らがメンバーである。なかでも福沢諭吉は合理主義・功利主義・実利主義の立場で『学問のすすめ』、『西洋事情』、『文明論之概略』を著し、大いに日本国民を教導した。文学は、江戸末期の戯作文学を継承したにすぎなかったが、啓蒙の役目をになった。開化期から明治二十年ごろまでの文学作品を過渡期の文学と呼ぶが、それは文学における啓蒙活動の柱であり、戯作文学、政治小説、翻訳文学の三つに分類される。

戯作文学とは江戸後期の戯作の流れを受け継ぎながら、その題材を西欧文化や開化期の日本の新風俗に求めた作品群である。仮名垣魯文『西洋道中膝栗毛』（一八七〇年）、『安愚楽

鍋』(一八七一年)、成島柳北『柳橋新誌』(一八七四年)、服部撫松『東京新繁昌記』(一八七四年)などが、このジャンルの代表的なものである。

政治小説とは自由民権運動の高まりに呼応して明治十年代には国会開設運動が活発になり、その政治的主張を普及させる目的で書かれた作品群をさす。矢野龍渓『経国美談』(一八八三年)、東海散士『佳人之奇遇』(一八八五年)、末広鉄腸『雪中梅』(一八八六年)などが代表的なものである。

明治初年代は西欧の実学の翻訳移入が中心だったが、明治十年代になって文学にも関心が向き、西欧文学の翻訳小説が流行した。フランスのジュール・ヴェルヌの冒険科学小説を川島忠之介が翻訳した『八十日間世界一周』(一八七八年)、イギリスのリットンの作品を織田純一郎が翻訳した『花柳春話』(一八七八年)、同じくシェイクスピアの戯曲『ジュリアス・シーザー』を坪内逍遥が翻訳した『自由太刀余波鋭鋒』(一八八四年)などが代表的なものである。

日本近代文学の出発

文明開化期の功利主義と実学中心の風潮は、時代が下るにつれて当初ほど一辺倒ではなくなり、次第に文芸の世界に目を向けるようになった。明治十年代後半になると、西欧近代の実情に照らして、封建社会において余技的に扱われてきた文学を見直し、また、教訓や政治などの手段として考えずに、文学そのものを他から独立させ、文学自体が目的をもつものとする意識が生まれてきた。新文学への改良運動がこれである。

一八八二年に出された外山正一らの『新体詩抄』は、詩の漢詩からの脱出を説くものであった。この理論を小説に及ぼし、勧善懲悪的な文学観の否定・写実主義の台頭を説いたのが、坪内逍遥の『小説神髄』(一八八五年)で

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

あった。写実主義とは、現実をありのままに描こうとする立場のことであり、十九世紀後半のヨーロッパでロマン主義に対立して唱えられた文芸思潮である。

『小説神髄』は、日本人によって書かれた日本近代文学理論史上最初の写実主義の道標であった。それに刺激を受けて、ロシア文学のリアリズム論を学んだ素養を生かしつつ、より徹底した写実小説理論を展開したのが、二葉亭四迷の『小説総論』(一八八六年)であった。『小説神髄』と『小説総論』とは、ともに日本の近代文学の実質的な出発を告げる評論として重要な位置にある。

坪内逍遥の実作『当世書生気質』(一八八五年)は、まだ戯作調を濃く残存させており、彼の近代文学理論を十分に実作化したとは言いがたいものであった。

二葉亭四迷の小説『浮雲』(一八八七年)は、理論を実践したもので、本格的な近代リアリズム小説として充実した内容をそなえていた。この作品は、言文一致体で書かれたことをはじめ、題材を普通の市民の中にとり、心理描写に優れることなどで意義深く、近代日本文学はここに出発したと言えるだろう。

明治二十年代の文学状況

明治二十年代は、急速な欧化主義の反動として保守的な思想や国粋主義が生まれ、日本の古典の再評価の風潮もおこった。擬古典主義とよばれるものがそれで、尾崎紅葉と幸田露伴とがその代表であった。

尾崎紅葉は一八八五年、友人の山田美妙、巌谷小波、石橋思案らと文学結社「硯友社」を結成し、機関誌『我楽多文庫』を創刊した。彼は、『二人比丘尼色懺悔』(一八八九年)で文壇に登場し、『多情多恨』(一八九六年)などを書き、『金色夜叉』(一八九七年)で大好評を博した。

幸田露伴は深く広い和漢の学識をもって、東洋的な理想主義の作品『風流仏』(一八八九年)、『五重塔』(一八九一年)、『運命』(一九一九年)などを書いた。尾崎紅葉と幸田露伴の二人の活躍したこの時代を〝紅露時代〟と呼ぶ。

浪漫主義は、ヨーロッパでは十八世紀末から十九世紀初頭にかけて盛んになった思潮であり、現実を美化し主観的、空想的に描こうとする考え方である。

近代日本における浪漫主義文学は、森鷗外の登場を先駆けとして、次の二つに分類される。

第一に、雑誌『文学界』(一八九三年創刊)の人々の文学傾向をさす。第二に、与謝野鉄幹・晶子らの『明星』(一九〇〇年創刊)派をさすものである。

ドイツ留学から帰国した森鷗外は、小説・詩・翻訳・評論の分野で多彩な活躍を示した。とりわけ留学体験を素材に書かれた小説『舞姫』(一八九〇年)は、留学によって近代的自我に目覚めた青年が、周囲の反対によって愛と立身出世との間で苦悩する姿を描き、文学の近代化に大きな役割を果たした。彼はまた、アンデルセンの作品を翻訳した『即興詩人』(一八九二年)、訳詩集『於母影』(一八八九年)を発表した。さらに評論雑誌『しがらみ草紙』(一八八九年)、『めさまし草』(一八九六年)を創刊し、ドイツ哲学・美学に立脚した評論活動を展開した。

『厭世詩家と女性』(一八九二年)、『人生に相渉るとは何の謂ぞ』、『内部生命論』(一八九三年)など卓抜な評論を発表した北村透谷は、前期浪漫主義の典型的な評論家・詩人として知られる。

この北村透谷を指導者として一八九三年に創刊されたのが雑誌『文学界』であった。島崎藤村・戸川秋骨・平田禿木・馬場孤蝶・上田敏ら、この雑誌に結集した文学青年たちは、その若々しい情熱を美と理想への欲求に傾けた。

この時期に、写実的でありながら詩美をたたえた雅文脈の小説『たけくらべ』(一八九五年)、『にごりえ』(一八九五年)を発表した樋口一葉が、短い作家生活の中で光芒をはなった。

明治三十年代の文学状況

明治三十年代には、与謝野鉄幹・晶子ら『明星』の人々が、若々しい人間の理想や憧れをうたいあげ、浪漫主義を代表した。その晶子の『みだれ髪』(一九〇一年)は官能的な恋愛賛美によって社会道徳に挑戦したものとしても知られる。

硯友社系の作家として登場した泉鏡花は、やがて自己の浪漫的な資質を生かして幽玄奇想の世界に活躍を示した。『照葉狂言』(一八九六年)、『高野聖』(一九〇〇年)、『婦系図』(一九〇七年)など、天性の浪漫主義者としての泉鏡花の本領がある。

徳富蘆花は、『不如帰』(一八九八年)を新聞に連載し、浪漫的小品集『自然と人生』(一九〇〇年)を発表した。

国木田独歩は、『源叔父』(一八九七年)、『武蔵野』(一八九八年)を叙情豊かに描いた。同じ時期、若き詩人島崎藤村の『若菜集』(一八九七年)が発表され、明治浪漫詩の代表的詩集となり、浪漫主義運動はこの詩集によって大きく開花した。詩壇ではこのほか、『天地有情』(一八九九年)の土井晩翠や、『海潮音』(一九〇五年)の上田敏、そして『明星』派の薄田泣菫、蒲原有明らが活躍した。

評論では、高山樗牛の『美的生活を論ず』は、本能の賛美、官能的・美的世界を強調したもので、文壇に大きな衝撃を与え、明治三十年代を通じて、青年期の人々の浪漫的風潮に強く作用したものであった。

明治四十年代の文学状況

日露戦争(一九一四～一九一五年)前後の日本資本主義確立期、社会の矛盾が深刻化する中で、文学も大きく変貌をとげる。明治四十年代を中心とする自然主義文学運動の展開である。

自然主義文学とは十九世紀後半、フランスを中心に起こった自然科学の方法を導入した文学思潮であり、実証精神に立ち、空想や美化を捨てて、現実と人間をあるがままに描くことである。日本では明治三十年代に小杉天外・永井荷風らによって、フランス自然主義の作家エミール・ゾラの方法が試みられたが、十分な成果をあげ得なかった。そして、その現実重視の傾向が、島崎藤村の『破戒』の出現によって明確となり、ここに日本の自然主義文学の成立をみる。

浪漫主義の詩人として出発した島崎藤村は、『破戒』(一九〇六年)で小説に転じた。社会的視野をもったこの作品は自然主義文学の礎石となった。しかし、その後、自然主義文学は、自らの体験・私生活を告白した田山花袋の『蒲団』(一九〇七年)をはじめ、社会との関わりを失い、やがて日本的な私小説のジャンルを派生させることとなる。

島崎藤村の『破戒』と田山花袋の『蒲団』との二作品をもって、日本における自然主義文学は本格的に誕生した。

島崎藤村は、さらに自伝的傾向の強い『春』(一九〇八年)、『家』(一九一〇年)、『新生』(一九一八年)などを発表して自然主義の代表的作家となった。一方田山花袋は『生』(一九〇八年)、『妻』(一九〇八年)、『縁』(一九一〇年)の三部作を完成させ、自然主義文学の時代の到来を導いた。国木田独歩は、自然の美を描写した浪漫的作品を書いたが、自然主義に作風を移し、『窮死』(一九〇七年)、『竹の木戸』(一九〇八年)などを書き、死後刊行された『欺か

ざるの記』(一九〇八年)で恋愛の苦悩を告白し、大きな反響を呼んだ。正宗白鳥・徳田秋声・岩野泡鳴らも自然主義作家として活躍した。

評論では、雑誌『早稲田文学』によった島村抱月が『囚はれたる文芸』(一九〇六年)、『文芸上の自然主義』(一九〇八年)などで、人生の真実を味わうことに文芸の本質があると主張した。また、長谷川天渓は、『現実暴露の悲哀』(一九〇八年)などで、自我主義に立脚した自然主義を提唱した。

自然主義文学の影響は大きく、今日まで及んでいるといえるが、全盛期は、一九一二年頃までである。

明治四十年代、文壇の主流を占めた自然主義文学が、人間のとらえ方が卑小・平俗に堕し、無理想・無解決の傾向が生じたために、それへの反動が相次いで現れ、批判的な文学思潮が形成され、反自然主義文学的な展開となった。大きく分けて三つの立場がある。

ひとつは森鷗外と夏目漱石の立場であり、余裕派(高踏派)と呼ばれている。第二は耽美派であり、永井荷風や谷崎潤一郎がこの派の代表的作家である。第三は白樺派で、武者小路実篤・志賀直哉・有島武郎らがその中心人物である。彼らは、自然主義文学の影響を受けながらも独自に文学の可能性を追究していた。

留学経験から西欧文化に触れ、深く広い学識と強い倫理観で、自然主義文学と対立したのは森鷗外と夏目漱石であった。文学の虚構性を重んじ、より深く個人と社会の問題を追求した二人は、日本近代文学の真の確立者といえる。まず、森鷗外は、雑誌『スバル』(一九〇九年創刊)や『三田文学』(一九一〇年創刊)によって、現代小説『キタ・セクスアリス』(一九〇九年)、『青年』(一九一〇年)、『雁』(一九一一年)などを書いたのち、『阿部一族』(一九一三年)、『山椒大夫』(一九一五年)、『高瀬舟』(一九一六年)などの歴史小説へ移行し、歴史への自由なアプローチを

試みたが、さらに『渋江抽斎』（一九一六年）などの史伝の領域を開拓した。一方、夏目漱石は『吾輩は猫である』（一九〇六年）で文壇にデビューしたあと、大学教師から作家へ転身し、『三四郎』（一九〇八年）、『それから』（一九〇九年）、『門』（一九一〇年）の三部作をはじめとして、『彼岸過迄』（一九一二年）、『行人』（一九一二年）、『こころ』（一九一四年）、『明暗』（未完）に至るまで、一貫して近代人の自我と孤独の問題を追求した。

この時期、自然主義文学への批判的な文学思潮が形成されたが、日本近代文学は明治四十年代に本格的な成立の時期を迎えることになった。

（二）大正期

大正期の文学

大正期に入ると社会一般にデモクラシーや自由主義の思想が浸透して、近代市民社会の確立が見られた。明治時代末期に反自然主義の立場で現れた耽美派と白樺派が、大正を代表する文学となった。

耽美派は、自然主義文学の描く醜悪さに反発し、人生最高の価値を美に置き、美の享受と創造を人生の意義であるという考えのもとに創作する一派であり、明治四十年代に創刊された『スバル』と『三田文学』、そして第二次『新思潮』とがその母体となった。代表的作家に永井荷風と谷崎潤一郎がいた。

永井荷風ははじめ自然主義のいち早い移植者としての功績があったが、外遊の体験を描いた『あめりか物語』（一九〇四年）、『ふらんす物語』（一九〇九年）で日本の文明を批判し、その幻滅から江戸文化に傾倒、『すみだ川』

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com